

## コラム56：イチローの店 （2017年3月）

「三宮に、いっぺん連れて行きたい店があるんやけどな」

「なんやそれ？何の店かいの？」

「イチローがよく行っとる、ステーキの店なんやけどな」

「そがいな高そうなトコ、恐ろしゅうて行きとうないわい」

……マニアックな野球ファンにして、「グルメ趣味」の息子と、少し前からそんな会話がありました。イチローというのは、もちろん「あのイチロー」、今も大リーガーで活躍している有名な野球選手のことですね。彼の説明によれば、「イチローがオリックスに入団した頃から、よく行っていた店なんや。今でもアメリカから帰ってきたら、必ず寄ってるらしいわ」。気になる値段のことを聞くと、

「イッペンだけ行ったことあるけど、そんなムチャクチャ高こうはないんやけどな」

「おまえな、イチローには大して高こうのうても、ワシらが行けるトコじゃなからうよ」

そんなこんながありました。結局は、「予約入れといたで。＜話のネタ＞にはなるやろ」と、彼の強引な誘いに、渋々乗せられた形で行くことになったわけですね。彼が大学に入学して以来、年に2-3回、18年も続いた私たちの「神戸詣で」（こうべもうで）も、今春に彼が広島にUターン帰郷することで、今回でオシマイ。「こっちの水が合うんや」と言って、18年も関西で暮らした彼にとっても、これが私達との最後の「神戸の宴」となります。そんな事情もありましたので、支払いの金額が気になりつつも、つつい「サイフの紐も緩んだ」というわけですよ。そうは言っても、「嬉々として」というより、「恐る恐る」出かけたというのが本音ですね。

3月4日土曜日の夕刻、JR三宮駅から山側に少し車で走り、駐車場から観光名所の異人館の方面に歩きます。坂道を少し上った所にその店がありました。植木の緑に覆われた古いビルの中に入り、エレベーターに乗り込むと、私達と息子夫婦と二人の子供たちの6人で一杯という感じ。「ここの5階やからな」下りると、細長い通路に面して、白い暖簾のかかった店が目前にあります。「この店やで」ー以外でしたね。「イチロー～三宮～ステーキ」というイメージで、モダンな造りの、VIPルームがあるようなハイカラな店を想像していたのですよ。こんな和風の地味な店構えは予想外でしたよ。それにここは、ステーキではなく、牛タンのお店ではないですか。＜ワシはイイにしても、ウチのカミサンは食べるじゃろうか＞などと不安がよぎりましたね。

ふと見ると、暖簾の下に張り紙が見えます。そこには「当店では無断での撮影等、他のお客様への迷惑行為を一切お断りさせて頂いております……」などとあり、さらに先には「退店して頂くことがー」などと厳しい言葉が書いてあるのですよ。＜なんだこの店！写真も撮らせてくれるのかい＞ちょっとイヤな気分になりましたよ。そうは言っても、予約を入れてここまで来とるのですからね。帰るわけにはいかず、障子状のガラスの引き戸を開け、店内に入ります。

受付のレジの向こうに細長く土間が伸びており、その両側が区切られた席になっているようです。若衆（わかしゅ）ー以下、店の若い男性の従業員をこう呼びますーが少し奥の席に案内してくれました。テーブル席は土間より50cm程度高くなっており、靴を脱いで上がり、掘り炬燵式のテーブルに座ることになります。席に案内してくれた若衆に、私は早速の質問。「ねえねえ、入り口に撮影禁止の張り紙あったけど、料理を撮ってもいいけん？」「それは大丈夫ですよ。店内や他のお客様を撮らないようにしていただければOKです」ーそりゃそうです！そこまでヤボなこと言わないと思いましたよ。



一見(いちげん)さんの私たちは、若衆と相談して注文を決めます。「一品ずつ注文しはるより、コースセットで頼まれた方が、オトクだと思いますよ」ということで、4人分のセットコースを注文。子供達は何にしようかと迷っていると、「お子さんの分は、サービスさせていただきます」という返事。<なんや、わりと良心的じゃないか>と、少し安心しましたね。暖簾と壁で仕切られているので、隣の席の声は聞こえないし、通路側にも短めの暖簾があるので、若衆が注文を受ける時に覗かない限り、外からの視線から遮断されます。なんや妙に落ち着いた世界がここに出来上がっている、という感じですね。息子のいう「イチローは、普通にそこらへんに座ってるらしいで」というのが、何となく理解できます。



まず出てきたのは、子供たちのご飯、タンシチュウがたっぷり入った丼ですね。6歳の孫娘が無言でパクパク、なんやウマそうに食べています。私達にはそれぞれに小皿に盛った牛タンのユッケ。酒のツケだしという感じでしょかね。生レバのようなホルモン料理を好む息子夫婦はよしとして、その類のモノは苦手なはずのカミサンが箸を付けているではないですか。「アッ、おいしい！」声を上げます。私は生ビールをゴクリと飲んでから一口、<イケるね！>。次に若衆が持ってきたのは、大皿に盛った牛タンが二皿。<出たな！本日のメインディッシュ>という感じで、綺麗です！一緒に二種類のタレの入った小皿が渡されます。「焼きあがりましたら、こちらのお好みのタレに漬けて召し上がって下さい」テーブルの中央にあるガス台の上に、丸いフライパン状の銅鍋が置かれており、大皿の牛タンを次々に放り込みます。カミサンが声を上げましたね。「オイシイ！牛タンってこんな味だったの！」なんや、ナンボでも食べるじゃないの。心配して損したワイ。

通路側に垂れた短めの暖簾の向こうで、二人の若衆が向かいの席の片付けをしています。その動きが実に素早くてテキパキ、無駄な動きがないのですよ。「へい！いらっしやい！」「ありがとうございます！」「ハイ！ビール一丁！」などと、やたらと声を張り上げています。「ここの店のモンは、みんな<体育会系>かい！」思わず私は声を上げました。女性の従業員の姿は見え、ハツラツとして威勢のいい若衆ばかり。「男の世界」という雰囲気ですね。

牛タンをアッと言う間に平らげて、少し腹が落ち着いたところで、若衆が次の料理を持参。大皿に盛られた色鮮やかな牛の赤肉！<これぞ「神戸牛」>という感じですね。肉盛りといっしょに玉ねぎとニンニクがタッブリ載って二皿！思わず聞きましたね。「これどうやって食べるの？」「このまま鍋と一緒にに入れてもらえばいいですよ」言われるままに、皿ごと一気に銅鍋に放り込み、強火で炒めると程なくいい色に。ソイツを箸で多めにつかんで、小皿のタレをチョイとつけて、熱いのを一気に口中へ。<こりゃ！イケるやないか！>上質の牛肉の甘味と、玉ねぎのパリッとした歯ごたえ、それにニンニクが絡んでコクを生んでいます。とっても単純な組み合わせながら、



見事なく三重奏を奏でてますな。こういうのを「御馳走」(ごちそう)と呼ぶんですね。こうなると、もう皆無言。黙々と食べています。あれだけ入っているのに、ニンニクの臭みは全くありません。私は思わず呟きました。「コレじゃがな！コレを食べとるから、イチローはまだ大リーグでやれるんよ！」



肉の大皿をペロリと平らげた後は、タンシチュウとタン入り五目ご飯。<とても食えんな>と思いま

したが、小鉢なので適量でしたね。そして最後は、ユズのシャーベットで締め。時間にして一時間余りだと思いますね。私達は席を立ち、入り口のレジで勘定を済ませます。気になる値段は大人一人が大一枚という所。食事、接客、店内の雰囲気、私のこの店の「満足度」は80点というところ。残念ながら、値段は安いとは言えないですから、100点満点にはなりません。息子夫婦は驕るつもりでいたようですが、彼らも子供と家のローンを抱えているし、私たちは年金生活者だし、ここはワリカンということで、円満に折り合いましたよ。息子と私達の、最後の「神戸の宴」の話は、ここで終わるはずでしたが……

「残念ながら、イチローには会えなかったかったのう」などと冗談を言いつつ、店の外に向かったその時です。私は暖簾の所で、入れ違いに「ある男」と肩を触れ合ったのです。一瞬、くエライ体格のエエヤツじやの>と感じました。外に出ると、息子が顔を少し昂揚させて、興奮気味に言うのです。「オトウサン！今の誰かわかった？」「イヤ、全然見とらんかったがー」「Sじゃないの！カープの！」思わず、店内に戻ろうとしたですね。すると、目の前に「迷惑行為お断りー」などと書かれたあの張り紙が一止めといた方が良さそうです。「一緒におったのは、ソフトバンクのUよね」「どうしてカープのS・Sがこんな所におるんじやろうの？」「WBCの試合がこっちであったんや」

私たちの席に付いてくれた若衆が、わざわざ店外まで送ってくれました。その時に思わず聞いてしまったのですよ。「ワシら広島から来たんよ！カープのS、よくここに来るの？」「エエ、まあ……」これはいけない質問でしたね。完全な「個人情報」ですからね。おそらくこの店はイチローだけでなく、プロ野球選手の「たまり場」のようになっているのでしょう。息子が言うには、「僕らの後ろの席におったのも、元プロ野球の選手やで。知らんやろうけどな」ということでした。初めてこの店に来た私たちが、カープの「神ってる男」に会ったのも、あながち偶然とも言えないのかもしれませんが。「店の外で会つとれば、一緒に写真を撮らしてもらえたんやろうにな」ー息子は残念そうでしたな。

この店は、私たちのように子供連れの家族が行く所ではなく、落ち着いた雰囲気です。食事と会話を楽しむための、「大人の店」なのかもしれません。有名人であっても特別扱いをしないし、彼らの私生活のプライバシーもしっかりと守る。それが、あの撮影禁止の「張り紙」であり、通路側の「暖簾」というわけですね。食事と接客を含めた「店の満足度」が、イチローをはじめとするプロ野球選手を自然に集めた、ということだと思いますね。

後になって気が付いたことですが、私達のような「一見さん」に、若衆が店の外まで見送りをするってスゴイことじゃないですか。往きつけの「飲み屋」で、帰りにママが送ってくれる、というのはよくありますよ。しかし、わたしたちは、「お馴染みの常連さん」ではありません。おそらく、彼はイチローが来た時と同じように、私達に接してくれたのでしょう。有名人の常連客は特別扱いをしないことで、むしろ彼らはくつろげるだろうし、一見さんは彼らと同じ扱いをしてくれることで、大変にいい印象をこの店に持つ。これが、「おもてなし」の本来の姿なのでしょう。私たちを出迎え、「至福の時」を過ごし、最後まで見送ってくれた若衆に、この「一流店」の心意気を感じましたね。

これも後日談になりますが、私たちがこの店に行った翌日の試合のことです。京セラドームでのWBC強化試合で、あの「カープの若武者 S・S」は逆転3ランを打ちましたよ。あの牛肉と玉ねぎとニンニクの＜三重奏＞が、さっそく効いたんですかね。スランプになったら、あの店に行って、今年も「逆転ホームー」をガンガンとブチかましてほしいものですな。顔も見えないけど、鍛え抜かれたキミの左肩の感触を、オッサンはシッカリと覚えとりますよ！

「神戸にも18年の間にずい分と行ったモンじゃが、やっぱり広島よりはハイカラな所よのう。ワシらは田舎モンということかもしれんの」